

2. 歴史環境

多久市が位置する北部九州地域は、大陸や朝鮮半島に近接する地理的特質から、古より対外交流の拠点であった。本来においても、人々の営みの足跡として歴史的文化的遺産が数多くみられる。多くの遺跡から石器や土器などが出土し、弥生時代の大規模集落や古墳、中世の山城などが確認されている。さらに古文書類、窯跡、建造物、社寺、工芸品、石造物、歴史資料なども豊富に残されている。先史時代から現代に至るまで、人々が社会と文化を営み、多種多彩な文化を創出してきた。

(1) 原始（旧石器～古墳時代）

多久市の南、鬼の鼻山は安山岩（サヌカイト）の産地で、この北麓に多数の大型尖頭器をはじめとする石器製作遺跡が存在し、本市の旧石器時代遺跡の特徴を示している。その中で茶園原遺跡、三年山遺跡は九州を代表する遺跡として著名である。また同性格の遺跡として、多久石器原産地遺跡群、長尾開拓遺跡などがある。

綿打遺跡と四下大丹遺跡からは縄文時代早期の押型文土器が出土しており、岡遺跡や西ノ原西遺跡は、扇状地に立地する縄文時代後期の集落であると考えられている。さらに、牛津川に面した長尾倉富遺跡、両子山中腹にある天山遺跡からは縄文時代晩期の遺物が出土している。

牟田辺遺跡は、まとまった住居跡や墳墓が確認され、同集落が弥生時代中期の多久盆地における拠点集落であったと考えられている。他にも、撰分遺跡からは竪穴住居跡、鴻ノ巣遺跡からは鉄製手斧の刃先など弥生鉄器、また、原田遺跡では弥生時代の甕棺墓などと祭祀遺構からなる墓地が発見されている。



写真 2-13 大型尖頭器
(多久市郷土資料館)



写真 2-14 茶園原遺跡



写真 2-15 安山岩の露頭



写真 2-16 三年山遺跡遠景 (写真中央)

古墳時代の主な集落遺跡は、羽佐間四反田遺跡、久保田遺跡、摺ケ本遺跡、今出川 A 遺跡、撰分遺跡などがあり、いずれも平野部に立地している。これまで確認されている市内の古墳の規模は径 10m 前後の小型のものが多く、現時点では約 150 基が認められる。ほとんどが横穴式石室をもっていることから、6 世紀から 7 世紀初期にかけて築造されたものである。このような小円墳は群集墳と呼ばれ、山の上古墳群は、その代表的なものである。また、この石室には線刻画が認められ、古墳の内外からは、武器・馬具・農工具・装身具、須恵器・土師器等が出土している。

(2) 古代（飛鳥～平安時代）

記録によれば多久地域は松津国造の支配を受け、7 郷 20 里からなる小城郡の中の高来郷に属していたと推定されている（『肥前風土記』より）。小字名から、別府には奈良時代の条里制（班田収授法の土地利用）が施されていたと想定されている。

妙覚寺は、天平 13（741）年の勅命による、僧行基の開山とされ、弘法大師（空海）の手によるものとされる両界曼荼羅図[県重]と石製四天王像があった。その後、一時廃れたが、平安時代の大同元（806）年に勅命により再興された。

平安時代中頃から末法思想が広まり、僧侶や有力者は仏教経典を地中に埋納するようになった。多久町山崎ではそれらを埋納した経塚が発見され、銅製経筒・陶製外筒・台石他が出土した。その筒の毛彫銘によると天治元（1124）年の埋納であったことが分かる。

このほかにも、平安時代の中小路増富遺跡の遺物では、土師器皿および鉄製品の製作が行われており、工輸入陶磁器の出土から 12 世紀多久の先進地であったことを示している。

平安時代末期、在地の管理者である地頭として紀州から諸松村に赴任してきた秋田氏は、長徳年間（990 年後半）にこの地を、納所村に改めたとされ、両子神社などを創建している。

古代の交通制度の道は、駅制と伝制からなるが、駅路は都と諸国の国衙（役所）を結ぶもので、本市では小城町より、渋木、山犬原、番所を通り、巖木町へ抜けるルートと、その途中の別府付近から分かれて、坊山、桐岡を経て北方町に出るルートが想定されている。

また、河川交通も発達したが、牛津川上流にあたる別府の小字の船津は、その地名より高来郷の中心的な津（港）であったと考えられる。



写真 2-17 牟田辺遺跡



写真 2-18 山の上 14 号墳（郷土資料館敷地内に移設復元、線刻画あり）



写真 2-19 妙覚寺（南多久桐野）



写真 2-20 山崎経塚の経筒（多久市史より）



写真 2-21 両子神社（東多久町平林）

(3) 中世（鎌倉～安土桃山時代）

1) 初代宗直と「前多久」

相浦氏はもと相神浦氏^{あいこのうら}といい、現在の佐世保市域を本拠とした松浦党の一族であったが、一族不和のために、治承3(1179)年同地を捨て、現在の北多久町相の浦に住みつき、その後、縁戚となった多久氏^{まへ}（前多久氏）に仕えたとされている。

そして、鎌倉時代初期、摂津の御家人である津久井宗直が多久の地頭として下向し、入部当初、下多久荘陣内に館を構え、のちに上多久の梶峰城^{かじみね}を構えたとある。宗直は津久井氏から多久氏と改名し、若宮八幡宮を創建したと言われている。

2) 元寇から南北朝期、その後の少貳氏の衰退

元寇を契機とした鎌倉幕府の滅亡、その後の南北朝時代と足利氏による統一を経て、室町時代、多久氏は筑前を支配している大宰府の少貳氏^{しょうじ}に従っていた。戦国時代に入って少貳氏は、山口の大内氏に押されて衰えていき、梶峰城に逃れたが、多久氏の助勢を得ることができず、政資は専称寺^{せんしょうじ}にて自刃、後にその子である資元^{すけもと}も同地にて自害している。

なお、多久荘という言葉は、南北朝期中頃の文書に表れている。また、多久氏は麓に建つ上多久の梶峰城（前期）の他に、戦国時代には山頂に梶峰城（後期）を建てて、守りに備えていた。

3) 前多久氏の滅亡と「後多久」の起こり

龍造寺隆信^{りゅうぞうじ たかのぶ}は、永禄2(1559)年、小城郡を勢力下に収めて、東肥前を支配した。永禄5(1562)年隆信は多久氏を追放し、ここに十四代続いた前多久氏の時代は終わった。

元亀元(1570)年、兄隆信の命により龍造寺長信^{ながのぶ}は梶峰城に入城して、多久の領主となり、後多久氏の祖となった。

秀吉による島津討伐の先陣を務めた長信の子家久^{いえひさ}（後の安順^{やすとし}）の功績により、天正18(1590)年3月7日、豊臣秀吉より御知行の御朱印を賜り、

【小城郡の内】多久、別府、納所、北浦、深河、江里山、初田ケ里、

【杵嶋郡の内】北方、医王寺、福母、喜佐の木、大渡、焼米、
山口、砥川、梶嶋、

【佐嘉郡の内】尼寺ノ内、上嘉瀬、萩野、八戸、真木、竹藤、
南里、新郷、鹿子、

【三根郡の内】矢俣、

以上合わせて、知行高3万2千8百余石を領有することとなった。

しかし、慶長16(1611)年1月に佐賀本藩より領地の3分を差出す命を受けて、尼寺村、八戸、鹿子、飯盛、木原、竹藤、袋、末次、真木、南里、新郷、矢俣、江里山、北浦、深河、初田ケ里、山口の内、以上合わせて17村地米4千9百余石を返納した。



写真2-22 多久八幡神社(多久町東の原)



写真2-23 専称寺(多久町東の原)



写真2-24 龍造寺長信像

更に元和7(1621)年8月には、3年間の3部上地が行われ、上嘉瀬、砥川、福母、喜佐木、大渡、の5か村合わせて3千4百50余石を差上げるが、ついに戻らぬ土地となった。

残るところの郷村は、多久、別府、納所、砥川の内、北方、志久、杵嶋、医王寺、山口の内、以上9か村は長信公御伐取の地。竹藤の内(岩松軒の寺地)、焼米、2か村は慶闇尼^{けいあん に}※御譲地の内萩野、(八戸、嘉瀬、萩野は、八戸宗暘の領地を長信公伐取の地)合わせて12か村地米8千6百余石となる。但し、水ヶ江東西城館の地(槇三十町の内)、康家公^{やすいえ}※以来代々水ヶ江家の館地として多久家に伝えられている。これらの領地は、明治2(1869)年の版籍奉還に至るまで続き、明治4(1871)年の廃藩置県を迎え新たな行政区域として出発した。

※慶闇尼：龍造寺隆信・長信兄弟の母。

※龍造寺康家：水ヶ江龍造寺家の祖。隆信・長信兄弟の先祖。

4) 文禄・慶長の役と「後多久」

文禄・慶長の役にも安順は多久の兵を率いて朝鮮に従軍し、戦功をたてた。その後、姓を龍造寺から多久に代え、後多久の初代となった。

(4) 近世(主に江戸時代)

江戸期、龍造寺氏の家臣であった鍋島氏(外様大名)が佐賀本藩を治め、多久領の領主である多久氏は本藩の親類同格の立場として藩の請役家老^{うけやく}など重要な職務に就くことが例になっており、佐賀城内に館を構えて生活することが多かった。

領内の多久御屋形には、要職の家臣が勤務しており、御構内に武家屋敷を構え居住していた。

1) 後多久歴代領主とその事績

主な領主の事跡は表に示す通り。

資料 2-17 後多久歴代領主事跡表

領主名	事 跡	領主名	事 跡
初代 ^{やすとし} 安順 	秀吉の命により、2度の朝鮮出兵に従う。 陶工李(金ヶ江三兵衛)氏、筑紫箏の創始者諸田賢順の援助を行う。 姓を龍造寺から多久に改める。	7代 ^{しげたか} 茂堯 	本藩の要請により、領内の兵を率い諫早騒動の平静化に寄与する。
2代 ^{しげとき} 茂辰 	佐賀本藩請役家老、島原の乱にて領内の兵を率い従軍する。	9代 ^{しげちか} 茂鄰 	長崎警固として、ロシア・イギリス船の入港に保護と応対を行う。
4代 ^{しげふみ} 茂文 	佐賀本藩請役家老を担う。 孔子を祀る聖廟(恭安殿)及び邑校東原庫舎を創建する。 「文廟記」を著し、儒学を中心に政教一体の施政を試みる。	11代 ^{しげつぐ} 茂族 	戊辰の役にて、将・参謀として会津藩をはじめとした東北・北関東の遠征軍を指揮する。後に明治政府より、伊万里県権令を任じられる。

2) 島原の乱と多久

島原半島有馬の郷民が圧政に対して反抗し、キリスト教徒と共に原城に立てこもった。この反乱に対して、老中板倉重昌の命のもとに、茂辰は多久の兵 2,300 人余りを率いて島原へ出兵し、さらに初代の安順も従軍した。この島原の乱で、多久勢の死者 99 人であり、帰郷後、茂辰は通玄院を建てて、死没者の追善を行った。

3) 長崎警固と多久

島原の乱後、幕府はいわゆる鎖国体制を厳重にするとともに、唯一の開港地である長崎に鎮を設けその防衛の強化を図った。寛永 19 (1643) 年に佐賀藩主鍋島勝茂^{かつしげ}に長崎警備の任を下した。その番役は、多久の領主にとっても重要な任務の一つであった。

4) 戊辰の役と多久

慶応 3 (1867) 年大政奉還によって生じた戊辰の役にて、茂族は最新鋭の銃や砲を用い、洋式に訓練された佐賀藩の兵を率いて、宇都宮、今市、白河口などで歴戦し、若松の会津藩との戦いに力を尽くした。

5) 「東原^{とうげん}^{しやうしや} 庠^{せいびやう} 舎^{しや}」・「多久^{きう} 聖^{せい} 廟^{びやう}」の創建

儒学に熱心であった茂文は、元禄 12 (1699) 年、東の原^{しげはら}椎原^{しげはら}山^{やま} (後の 昌^{しょう} 平^{へい}山) の西麓に東原^{とうげん} 庠^{しやう} 舎^{しや}を建てて、儒者の川浪^{かわなみ} 自^じ 安^{あん}を初代教授とした。

本舎は、幕末までの約 170 年間一貫して文武両道の科目を課して、日本の近代化や郷土のために尽くした人材を多く輩出した。

一般に、藩校、郷校では武士の子弟の教育が第一であり、当初本舎も彼らのみであったが、中期以降には農民、町人にも入学が許され、主に分校や、時には本舎で学ぶことができた。漢学を中心としながら和学さらには諸武技を学んだ。さらに、茂文は、東原庠舎内に置かれていた孔子像に代わり、新たに像を鑄造し、それを安置するための聖廟を建てることとした。

廟は、宝永 5 (1708) 年、東原庠舎の五十間東の椎原山の麓に落成して、恭^{きやう} 安^{あん} 殿^{でん}と名付けられた。現在の多久聖廟[国重文]である。

廟内中央奥にある聖龕^{せいがん}[国重文]と呼ばれる八角形の厨子^{ずし}の中には、儒者^{なかにわらできさい}中村^{なかにわら} 惕^{てき} 斎^{さい}に製作依頼した孔子像が安置されている。

春と秋の年に2回儒学の先哲を祀る^{せきさい}^{せきさい} 秋^{しゅう} 菜^{さい} [佐賀県指定重要無形民俗文化財]の儀式は、現在まで続いている。

6) 肥前磁器陶器の源流としての多久

朝鮮への出兵後、連れ帰った韓人李氏 (帰化後、金ヶ江^{かねがえ} 三^{さん} 兵^{べい} 衛^ゑと記録に残る) を引き受けた安順は、慶長 4 (1599) 年、彼に窯を作って試焼させた。これが、現在の国史跡である肥前陶器窯跡の一つ唐人古場窯跡 (多久町西の原) である。その後、彼はそこを閉窯し、西多久の高麗谷、大山に移って多くの焼き物を作ったが、満足できず、多久を去り有田に向かったという。



写真 2-25 東原庠舎跡 (多久町東の原)



写真 2-26 多久聖廟 (多久町東の原)
[国重文・史跡]



写真 2-27 唐人古場窯跡 (多久町西の原)

この点からみると、多久は肥前磁器の源流の地の一つであるともいえる。三兵衛が去った後、彼の技法を学んだ保四郎は、道祖元にて開窯して幕末まで続けられた（保四郎窯（多久町道祖元））。他に、大山新窯（西多久町藤川内）や前田窯（北多久町前田）などが作られた。

7) 筑紫箏（つくしごと）

筑紫琴は筑紫流箏曲のことであり、現代箏曲の源流といわれる。この創始者として知られる諸田賢順（1534～1623）は筑後国に生まれ、戦乱を避けて逃れていたが、多久に招かれ移り住んだ。賢順自作の箏は市立郷土資料館に所蔵さ



写真 2-28 立葵蒔絵螺鈿箏[県重文]

れている。また、安順妻千鶴の愛用箏と伝えられる立葵蒔絵螺鈿箏がある。

8) 多久の交通・駅、石炭

江戸期には往来が盛んになり、道が整備された。その主要なものは街道や往還などである。往還とは、街道につぐ道路である。多久には、唐津往還と伊万里往還が通っている。牛津より長崎街道から分かれた唐津往還は別府、多久原、山犬原を通して現唐津市に抜ける。また、伊万里往還は別府にて唐津往還から分離し、上田町、長尾、多久城下、道祖元、板屋を経て、伊万里に至る。この伊万里往還の道筋は、現在の道路に踏襲されている。

また領内には、別府、多久、志久（現武雄市）の三つの駅があり、旅人のために宿や馬が準備されていた。別府は、相当数の戸数があり、六斎の日に市が開かれ（月 6 回）、商業や宿場町として邑内でも一番大きい町であったと思われる。多久は、伊万里往還の宿場町として、さらに多久御屋形や東原摩舎があり、多久の政治的文化的な中心を担っていた。

多久邑では、寛永年間（1750 年頃）には石炭が採掘されており、その後重要な産物となっていた。現在の北多久町、東多久町である。石炭採掘は農民の生活の補いとなり、多久領の財政運営に益するなど、近世末期における重要産業として発展していった。

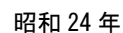
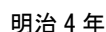
※邑（ゆう）：村と同じ意味、特に多久などでは、村とよばず邑と称した。

（5）近現代（明治、大正、昭和、平成）

1) 村の成立と多久市の誕生

明治 2-4（1869-1871）年、版籍奉還を契機に旧来の郷村制を改め、多久地域では、8 か所の村がつくられた。さらに、明治 22（1889）年以降、北多久村（小侍村と多久原村が合併、昭和 24 年町制施行）、東多久村（別府村と納所村が合併）、南多久村（下多久村、長尾村、花祭村（杵島郡より））、多久村、西多久村（板屋村が改名）の五つ行政組織となった。

昭和 29（1954）年、多久 5 か町村合併による多久市が発足し、現在に至っている。



資料 2-18 明治以降の多久の行政区域

明治 2 (1869) 年、東原庫舎は多久郷学校と改称され、さらに、明治 4 (1871) 年には多久小学校となり、明治 6 (1873) 年には東原庫舎は民間に払い下げられ、閉校した。

平成 3（1991）年には、東原庫舎の名をもつ研修宿泊施設ができ、平成 25（2013）年、多久市立の小学校、中学校は統廃合され 3 つの小中一貫校、さらに平成 29 年には義務教育学校となり「東原庫舎 東部校・中央校・西溪校」と称せられている。

多久地域は、江戸時代より石炭の採掘が行われ、明治時代に小規模炭鉱経営が行われ、石炭需要が高まった大正時代になると、大手資本による規模の大きい炭鉱が出現した。三菱古賀山炭鉱、明治鉱業多久炭鉱などである。

大正後期から昭和初期の不況の影響で閉山もあったが、その後の軍需生産体制に伴って、採掘が再開された。

敗戦後の佐賀県の復興の担い手として炭鉱は重要な役割を果たし、昭和 35（1960）年には 306 万トンを出炭し、佐賀県のその約 4 割を占めていた。人口も 45,600 人余りとなり、このうち約 35%が炭鉱関係の人々であった。

その後、エネルギー源の中心が石油へと移行し、石炭産業は衰退して各地で閉山が相次ぎ、多久市でも昭和47（1972）年にはすべて閉山した。

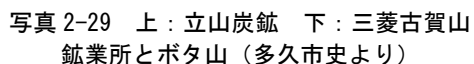




写真 2-30 豎坑櫓跡（東多久町）



写真 2-31 JR 唐津線とホッパー跡（北多久町）



写真 2-32 炭鉱関係資料
（多久市歴史民俗資料館）



写真 2-33 旧馬神隧道（多久町）

4) 多久の交通

大正末期、多久郷内の主要な 3 本の路線が県道に編入され、これに付随して、村道が設置され、新設改良が進められてきた。その後、佐賀市と唐津市を結ぶ国道 203 号が本市地域の中央部より東西に走る基幹道路となり、そこから分岐する主要地方道や接続する県道が建設された。また、昭和 62（1987）年には九州横断自動車道（長崎自動車道）が開通し、多久市にはインターチェンジができ自動車の利便性が高まった。

明治 36（1903）年鉄道は唐津から延伸し、多久地域内を西から東に通じ、長崎本線の久保田まで開通した。この唐津線には、各炭鉱から専用の運炭線が多久駅、別府（後に東多久）駅に敷設され、石炭積み出しの大きな役割を担った。明治 42（1909）年には国鉄唐津線となり、石炭産業が盛んであった昭和 20 年代から昭和 30 年代にかけて最も利用された。その後、昭和 39（1964）年に中多久駅が開設され、昭和 61（1986）年には、国鉄から九州旅客鉄道株式会社の唐津線となった。

5) 文教の里を目指したまちづくり

多久聖廟を核としその周辺地域を含めたまちづくり、という市民からの意見に応じて、市では多久聖廟の大改修（平成 2 年終了）を実施し、歴史公園とする^{たんきゅう}丹^{きと}邱の里整備事業、東原^{とうげん}^{さや}庫舎の建設計画を進め、「文教の里」づくりを推進している。そのため、財団法人孔子の里を平成 2（1990）年に設立し、市民の協力を得ながら、事業を進めてきている。



写真 2-34 多久聖廟周辺区域



写真 2-35 西溪公園と資料館